みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.101

ひと言

新型コロナに主体的に向き合う子どもを育てるために

渡辺　孝之（センター運営委員）

「自分が感染したらいやだ」「差別がおこっていやだ」「夏休みが減った」「花山合宿に行けない」「マスクをずっとつけたままがいや」「友だちと家で遊べない」「お出かけできない」……新型コロナ発生から1年、子どもたちに嫌なことや困ったことを書いてもらいました。

新型コロナ対策の「規制」により、子どもたちの成長に不可欠な3つの「間」、「時間」「空間」「仲間」が奪われています。人間としての成長発達の危機です。これを長期間続けたらどんな影響が出るのでしょうか。強い規制を強いるのであれば、同等のケアを講じる必要があります。三密解消をきっかけにようやく動き始めた少人数学級はその第一歩です。それは、学力向上だけのためではなく、子どもたちの豊かな成長を保障するために必要なものです。同時に、規制に従うだけではなく、新型コロナに主体的に向き合う子どもを育てるために学校は何ができるか……模索しています。

目次　　2020年12月

ひと言　渡辺　孝之　1

コロナ禍での科学的教育活動 ～子どもの学ぶ権利の保障～　岩倉　政城　2

座談会
主体的にコロナと向き合う子どもをどう育てるか　6
～コロナ禍の中での学校教育～
笹川　聡　中村　朱里　小野寺修子
芳賀　郁雄　賀谷あゆみ　日下　幸子

コロナ禍での高校教育の現状と課題　豊永　敏久　14
対面授業の難しさとありがたさを感じて
～コロナ禍の専門高校の日々～　山屋勇一郎　15

授業報告（小学校）
新型コロナウィルスの授業　矢部智江子　16
やっとでた！ 貴重なコロナの教育実践　数見　隆生　19

読書のすすめ（第２回）　春日　辰夫　19

１年間で破綻した!?　午前５時間授業　鈴木　賢二　20

日本学術会議第25期会員任命に関する声明　21

気象庁の「生物季節観測」の縮小・廃止に思う
こどもたちの季節感が失われていく　千葉　建夫　22

おすすめ映画
「ファーザークリスマス」　鈴木　吉雄　24

センターの動き・編集後記　24

表紙写真：朝市センター保育園　　題字：江島　隆二

コロナ禍での科学的教育活動

～子どもの学ぶ権利の保障～

新日本医師協会 顧問　岩倉政城

1　子どもたちの意見表明権は何処へ

「え！　来週から学校ないの？」何の準備もないまま金曜日の文科省通知で翌週から学校が休みになって一番困惑したのは子どもたちでしょう。「どうして休まなければいけないの」、「なぜ感染も広がっていないこの地区で休むの」、「友達にこのまま会えなくなるの」、「僕たちの卒業式はどうなるんだろう」。

2月の文科省次官通知は要請であって、命令ではありません。「臨時休業の期間や形態については、地域や学校の実情を踏まえ、各学校の設置者において判断いただくことを妨げるものではありません」と明記されています。

しかし蓋を開けると全国の99％が一斉休校に入りました。沢山の不安が渦巻いたはずなのに、政府の要請に抗して小中校を継続したのは大田原市などわずか1％にも満たない316校でした。当該市長は「共働きや一人親家庭の事情、管内で発症者がいないことを考慮し、地域全体で子どもたちを守る観点から春休み期間まで午前授業としました」と、堂々とこたえています。

「君たち、このままだと今日一日だけしかみんなと話せない。来週からは学校を休みにしなさい、って国が言ってきてるんだけど、君たちの意見を聴いて、その上で先生たちで対策を話し合ってみるから」と、生徒に語りかけた先生は何人いたでしょうか。

日本が批准している子どもの権利条約には「子どもに影響を与えるすべての事柄について自由に自己の見解を表明する権利を保障する」としています。子どもたちの学ぶ権利、友達と関わる権利、成長する権利行使の最大の窓口は教師です。とは言え、わずか一日の間に子どもたちの意見を反映させて行動に移すことは至難の業。現場を無視した国の通達の唐突さこそが非難されるべきでしょう。

一斉休校の予防効果に科学的根拠はない

専門家で構成されるコロナ対策諮問会議は全国一斉の休校を検討していなかったにもかかわらず、安倍官邸からの一方的な決定で通知が出されたのでした。

日本小児科学会は5月に「学校や保育施設の閉鎖は流行阻止効果に乏しく、むしろ子どもの心身を脅かしている」と見解を表明し

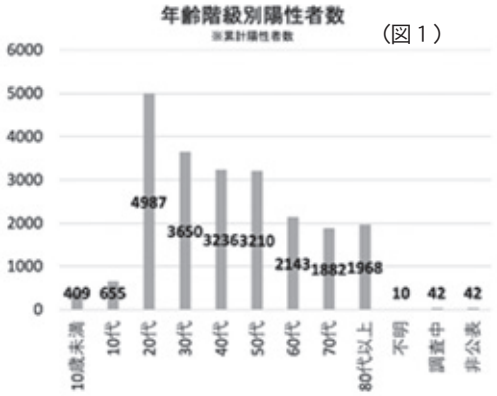
ました。

４月の英国医学誌 Lancet の小児青年期医学でもコロナウィルスのアウトブレイク時の学校閉鎖は有効でなかったとまとめています。

極端に低い子どもの感染リスク

子どものコロナ感染は少なく、年齢別ＰＣＲ検査陽性者数の厚労省データ（２０２０／７／15現在）をみても10代とそれ以下は4.8％に過ぎません（図１）。小児科学会に全国から時々刻々寄せられるデータでも子どもの死亡例は皆無（２０２０／11／14現在）です。

また子ども（20歳以下）の感染由来は家族からが78％で（日本小児科学会調べ11／14現在）、学校・幼稚園・保育園での子ども同志が感染源となったのは4.8％（著者算出）に過ぎません。その理由は子どもの免疫系が抗体を作る前の非特異的な感染防護が強く働くこと、子どもの細胞表面にコロナウィルスが感染に使う突起の受容体が少ないため感染しにくいからです。



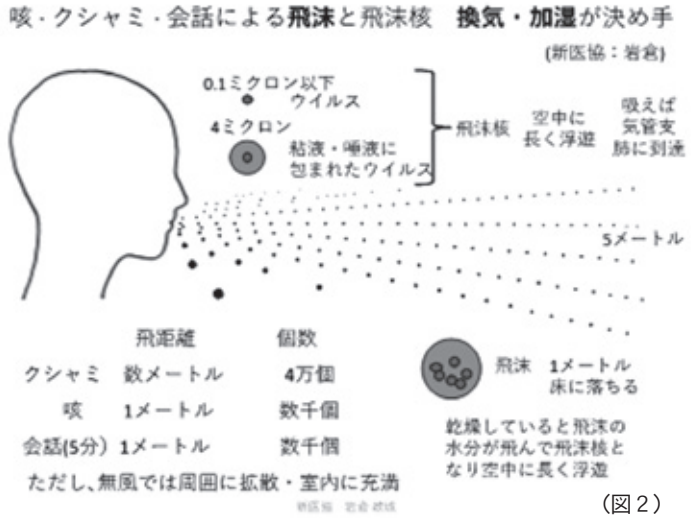
（図１）

２　学校環境下の感染対策のポイント

コロナウィルスによる感染ルートは飛沫感染と接触感染です。図２に示したように会話でも多量の飛沫が口から生じ、教師は教室の隅々まで届かせるため声を張り上げて話し、飛散量は多くなります。その抑制には発話者のマスクが効果的ですが、マスクの隙間からは微小な飛沫が漏れ出します。

屋内授業の野外化を試みる

あらゆる対策の前に、今行っている教育活動は教室や屋内でしかできないのかを、是非見直してください。飛沫も無限の大気に拡散すればウィルスはゼロに近くなり感染のリスクがなくなります。マスクを外して思い切り活動が出来るのが屋外です。屋外での授業や終業式、屋上やベランダで歌を唄う、木陰でホームルームなど、教師の創造性を発揮して授業と行事の改革に取り組んでください。閉じられた空間から子どもたちが解放されて思わぬ効果が現れます。



（図２）

対角線の持続的換気

微小飛沫は気流が無ければ空気中を漂い、拡散して教室中を覆います。それを防ぐ方法が換気です。換気を30分に１回などとしないで常時教室を空気が流れる持続的換気が大切です。冬期も夏期も教室の温度調節能のギリギリまで窓を開ける量を調節して、できるだけ新鮮な空気を入れ、廊下側の扉や窓を開けて、気流を生徒側から話している教師側に向かって流し、排気される対角線型の気流を工夫してください。廊下側に高窓があればその開放を優先し、エアコンがあれば常時動かして教室に空気の淀みをなくしてください。なお、廊下側の窓を開けても廊下の更に外側の窓が開いて

いないことには空気の流れは起きません。

大容量加湿器を各教室に1台

飛沫は唾液や粘液を含んだ水に包まれて床に落ちますが、小さい粒子は浮遊を続け、乾燥していれば水がなくなり空中浮遊が長時間続きます。これを防ぐには容量の大きい加湿器を全ての部屋に1台置き、空気の流入口近くから発生させて教室を加湿します。なお、加湿器は水カビ等の増殖がかえって健康に影響するので頻繁な掃除を忘れないでください。

マスク等の工夫

マスクの長時間使用は自分の呼気の再吸気がおこって酸素不足による息苦しさがあります。酸素不足を補おうと口を開けて呼吸しがちで、かえって感染リスクを増すことになります。できるだけ生徒に鼻呼吸を促し、鼻粘膜の粘液と鼻毛でウィルスの感染を防いでください。

触覚防衛反応の強い発達障害の子どもにはマスクの着用は大きなストレスです。会話などがなければ飛沫の飛散もありませんので着用を強いることは避けましょう。英語の授業など特に口の動きが教育上不可欠の場合はマスクの代わりにフェイス・マウスシールドなどの活用も検討してください。ただし飛沫防止効果はマスクよりも劣るので、より頻繁な換気を心がけましょう。

薬液うがいの一時的効果の活用

ポピドンヨード（イソジン®など）のうがいを毎日行うと口の粘膜を傷つけることになり、かえってウィルス感染の機会を増やします。しかし、うがいで一時的に口内が無菌（ウィルスの不活化）になるので、マスクなしの対応がどうしても必要な場合には薬液うがいの後、短時間ですが生徒との交流に活用してください。表情を必要としている障害児や合唱、吹奏楽にも応用できます。

ガラガラパチパチチィーンで予防

授業終了後には水道水でガラガラうがいを、目を流水に晒してパチパチ洗いを、最後に鼻の入り口まで水を吸ってチィーンとかみましょう。ウィルスは粘膜から侵入するので目鼻口の流水による洗浄は効果的です。

3　三密回避の環境改善の欠落

文科省の一斉休校後の再開時通達では「3つの条件（換気の悪い密閉空間・多くの人が密集・近距離での会話や発声）が同時に重なることを徹底的に回避する対策が不可欠です」と謳いました。謳ったからには実質的な対策が必要ですが、「感染症対策や学習保障のために迅速かつ柔軟に活用できる経費を1校あたり100～500万円支援」とのことです。エアコンの設置どころか加湿器と電気代で吹っ飛ぶ金額です。

20人学級の実現こそ

長年過密な40人学級を現場に強要してきた国は、三密回避の絶対条件である少人数学級への対策は一切とろうとしません。やむなく現場では分散登校など、教師の負担になる学級運営をせざるを得なくなりました。とはいえ、授業の遅れを補うため、結局はすし詰めの教室での授業に戻らざるを得なかったのが実態でした。暑さ寒さを迎える中で、換気しようにもエアコンなし、貧弱な暖房では耐えられるものではなく、結果的に三密回避が環境上不可能なままです。

「手洗いうがいの励行」が可能か

接触感染予防の決め手である手洗いは児童生徒数あたりの水道蛇口の数によって可能かどうかが分かります。

昼食前の手洗いに限っても、授業終了後一斉に生徒が手洗い場

に向かうと、蛇口一つ当たり10～20人が列を作らねばなりません。密が避けられないばかりか全員の手洗いに10分もかけたら給食時間も足りません。少なくとも蛇口一つ当たり4～7人にし、蛇口間隔を広げ、肘コック式か自動にしなければ却って感染を広めることになりかねません。となれば、手洗い場の増設と改修が必須で、その予算措置もしないで三密回避を指示することは許されません。

遠距離バス通学の三密

政府の誘導で学校の統廃合が住民を無視して進められてきました。そのため徒歩からバス通学やスクールバスに大きくシフトしています。バス待ち、バス内での密集が毎日繰り返され、部活などで退勤ラッシュの密集の中を生徒と一般客との同乗が常態化します。路線バスやスクールバスの増便による密集の緩和など、財源に裏打ちされた対策が求められます。

マンモス化にコロナ対策が追い討ち

学校統廃合の強行で学校のマンモス化が進行し、授業中の抜け出しや、いじめなどがおこりがちです。その上に襲ったコロナ禍で教師は授業の遅れを取り戻す作業に追われます。加えて、検温、マスク着用の指示、消毒液での手指消毒の呼びかけなど、課題が積み重なります。対策は、兼務なしの複数担任制、少人数学級、学習指導要領の簡素化で教師による授業の大幅な自由裁量権の保障、野放しの残業を強いる教職調整額を廃止して本俸化し、職員増による時間外労働の短縮が今こそ求められています。

何回でも公費でＰＣＲ検査を受ける権利

不十分な環境下では感染予防を心がけていてもクラスターが起こり得ます。教職員は微熱や喉の痛みの度に、もしや感染したのではないかと不安に襲われながらまんじりともせずに過ごし、観劇も、食事会も諦めて過ごしています。体調不良を感じたら受診し、医師の判断で要検査となったら何回でも無料でＰＣＲ検査を受ける権利を保障すべきです。

感染ゼロを目指してはならない

感染ゼロを実現するには医療用のマスクと使い捨て予防着、手袋、帽子、靴カバーが必要で、究極は人と接しないことです。管理側はリスク回避を求めて「何もしない」へと際限なく舵を切ろうとします。それは「子どもたち―教師」、「子ども―子ども」の関係を断ち切り、そのまま教育が崩壊することを意味します。流行地でなければ対面授業に切り替え、発言以外はマスクを外す等の柔軟さが必要です。修学旅行も生徒たちに自主的に感染対策を委ね、文化祭を大胆にまかせるなど、コロナ禍だからこそ子どもたちが科学的感染防止を考えながら集団で困難を乗り越える成功体験を得る機会にしたいものです。

4　教育を守る活動とコロナ便乗型資本主義を見抜く視点

財界と政府は規制緩和で自由な金儲けができる新自由主義に基づく政策を進めています。国や自治体の公共事業を民間の自由競争に投げ出す小さな政府作りで、学校給食も水道やガス事業も民間に放出しています。その一環で公務員の半減化が目標にされ、保健所が半減し、学校の統廃合政策が既定方針です。さらにSociety5.0と称するＩＴ化を進め、市場規模を７６０兆円と見込んでいます。唐突な学校休業で一気にＷｅｂ授業を促進させ、高等教育部門では教科教育の映像化で教員削減を図る動きも出ています。国と財界が目論む政策の一環が、現場では教員の長時間残業や授業のＩＴ化などに現れているに過ぎません。私はこれを「コロナ便乗型資本主義」と定義しています。子どもの学ぶ権利の擁護はこうした政策と真正面から対峙しなければ守り切れるものではありません。

（尚絅学院大学名誉教授）

座談会

主体的にコロナと向き合う子どもをどう育てるか

～コロナ禍の中での学校教育～

〈座談会参加者〉

【小学校】笹川　　聡さん　中村　朱里さん

【中学校】小野寺修子さん　芳賀　郁雄さん

【養　護】賀谷あゆみさん　日下　幸子さん

突然の「コロナ休業」で始まった今年度の学校教育。休業中、休業明け、6月からの新学期、短縮された夏休み、そして、2学期。子どもたちと教職員はどうだったのか。11月14日（土曜日）県内各地の小中の先生方と養護の先生に集まっていただき、子どもと教職員の状況と問題点・課題を語っていただきました。

◆一斉休校中の学校と子どもたち

司会　まず一斉休校中を中心に教職員と子どもも、学校の様子などについて感じてきたことをお話していただければと思います。

笹川　学校規模は、全校児童で389人、各学年2クラス。一番多い6年生は38人と37人のクラス。あとは大体30人ぐらい。6年生の教室は間隔をあけるときつきつの状態で授業をしています。

コロナ休校中の学校の様子は、どこの学校も同じだと思いますが、2月末から始まり、従来どおりの卒業式はできませんでした。でも何とか4月には再開するだろうと思っていたら、大崎市は、入学式2日前でまた延期。その時の情報では2か月間は動き出さないだろうということになって、こういう中でやっていくしかないと覚悟を決めました。

休校中に何をしていたかというと、大崎市では家庭訪問です。こういう感染状況の中で、戸口訪問をしていいのか、職員の中で揉めました。仙台市などはポストインのような形で課題を届けたようですが、大崎市は子どもたちを呼んで1週間の課題を与えて1週間後にまた取りに来るという形でした。その後5月末あたりから、分散登校でクラスの半分の子が来るという形で授業を再開していきました。

クラスを半分にすると、先生方は同じ授業を2回しなければならないのですが、子どもたちの様子などを比較的安心して見られたようです。

もう一つ休校中のことで言うと、休校が明けて分散登校の間に「コロナウィルスってどんな病気なの？」とか、「コロナウィルスにもし感染したら？」などを教材として準備しながら、子どもたちを迎え入れることを始めました。

中村　私は仙台ですが、休校中、保護者が仕事を休めない新1年生は午前中、2年生から4年生は午後1～2時ぐらいまで預かってました。その後は児童館とかに行っていたみたいです。一番大変だったのは入学式をまだ迎えていない新1年生の受け入れでした。2年生から4年生はある程度指導ができましたが、新1年生は幼稚園や保育所から上がったばかりだし、親の顔もあまりわからないので、どこまで指導していいのかすごく悩みながら取り組みました。最初の頃は、元低学年担任だけで見ていたんですが、ちょっと負担が大きいということで、途中から全教員で見ました。

あとは戸口訪問をしたり親に課題を取りに来てもらったり、登校日があったりと笹川先生と同じです。

司会　中学校はどうですか。

芳賀　職場は村田町ですが、休みに入って3年生をどう卒業させるかが課題になりました。歌関係を全部除いてすごく簡略化させて卒業式は行いました。

4月に入ってからは、ほとんど生徒との連絡も取ってなくて、後半に週1回は連絡をとりましょうということで電話を掛ける感じでした。転勤してきた方や初任の方は手持ち無沙汰というか何をしていいかわからない状態が続いて、ずいぶん悩んでました。

6月のスタートに向けて分散登校をしたのは2週間ぐらいですね。全校生徒が180名ちょっとで、2、3年生は2学級ずつだったので、午前・午後に分けて週に2年生は2回、3年生は3回みたいな感じで2時間登校して、少し慣れてもらう感じでやっていました。1年生とは、入学式で初対面みたいな感じでした。中学校としては、新1年生についてはタッチしていない状況でした。

司会　多賀城市はどうですか。

小野寺　勤務校は500人の大規模校です。各学年5クラス。それに特別支援が3クラス。2月末に突然の休校で、部活をどうするということになって、代わりに早朝ランニングとかをのんびりやっていましたが、陸上自衛隊の駐屯地で感染者が出て、それもダメになりました。それでグランドでは球技のみ。ずいぶん職員会議では揉めたんですけど、弾力的に運用したみたいです。

あと全体では、週1回の安否確認の電話がけですね。学級担任は大変でした。それから課題の教材プリントです。課題を入れた大きな茶封筒を10軒から20軒くらい、地図を見ながらポスティングするわけです。2回やりました。

あと私は特別支援担任で、子どもと会えないのが困る。担当教科は美術なので、絵を描いて葉書を送りました。一人3枚くらいかな。子どもと何とかつながっていたかった。そんな感じでした。

司会　休み中、生徒たちはどうやって過ごしていたんですか。

芳賀　オンラインゲームですかね。

小野寺　ゲーム漬けですね。昼夜逆転している子もいて、電話かけても親は出るけど、本人は寝てるというのもありました。

日下　ずっと家に籠っている子もいたり、運動していた子もいたり様々だったようです。あと塾も休校明け前からもう始まっていたところもあって、塾に行き出す子も。

笹川　私は6年生の子たちを卒業させましたが、その子たちは結局6月1日まで宙ぶらりんの生活です。中学校からはまだ入学していないから声をかけられないというので、私が何回か元担任として電話をしました。ほとんどの子が家に居たと思います。入学前の子たちに対応したのは仙台ぐらいじゃないですか。

小野寺　休校中、学区巡視をするとコンビニで買い物してる子に会ったりして、声をかけたりしました。

日下　私も巡視で生徒たちと会うことがありました。子どもたちは個々に連絡を取って、朝の公園に集まって運動したりしていたみたいです。うちの学校は、運動させることも必要だということで、家に戻れという形式的な指導はしないで、「あんまり遅くまでいるなよ」とか、「あんまり人数集まるなよ」ぐらいの声がけにしてある程度黙認してました。

司会　養護教諭から見て、休み中はどうでしたか。

賀谷　日中は児童預かりをしてました。児童センターに行く1年生から4年生までの子どもがほとんどだったのですが、教えたりすることは差別につながるからダメだというので、自分の家から持ってきたドリルをさせたり本を読ませたり、絵を描いたり折り紙を折ったりしてました。見守ることしかできなくて、すごくまどろっこしいねと先生方も言ってました。子どもたちが帰った後は、必ず消毒作業で、私は手すりや子どもたちが使った机などの消毒作業をしてました。

うちの学校も、分散登校は3日くらいあったと思います。時間差で40分ずつみたいな感じで、その間に、必ず消毒してみたいな感じで。ポストインも3回ぐらいはしたと思いま

す。

司会　教えてない子との差ができるから教えるなという指示があったそうですね。日下さん、中学校の養護教諭として心配したこととか、何か感じられたことありますか。

日下　不登校に関わることを話しますと、去年まで不登校だった子が、休校になることで気持ちが楽になって学校に来はじめたということが言われたりしてますが、実際そういうことがありました。だけど1か月ぐらいすると疲れてきて、元のように昼夜逆転して来られなくなって続きませんでした。それから去年まで休みがちで学校に我慢しながら来ていたような子たちは、休校の間に昼夜逆転したりゲームしたりして、学校に行くのがすごくつらくなって、学校が始まってだんだんに、夏休み明けとか不登校になって、不登校が今すごく増えました。昼夜逆転した子は、不登校の子に限らず、かなり多くの子がそうだったようです。

　あと体力面は、例年だったら中総体に向けてガンガン部活をやってた子たちが運動できなかったのはすごいストレスだったと聞きます。体育が始まって、久し振りに全力で走ったりしてうれしそうにやってましたけど、元気だった子が具合悪くなって保健室にくることが結構ありました。学校が始まったころは、よく3年生の男子が体育の後、具合悪くなってました。「体力落ちたね、これからだね」なんて話をしました。

◆学校再開後の学校と子どもたち

司会　では次に、再開後の状況について話を進めたいと思います。小学校はどうですか。

笹川　学校再開後は、状況がなかなか見えない中で、いろんな不安が先生方にもあったと思います。私自身が一番心配したのは、感染リスクがゼロでないなかで、子どもがコロナにかかって、家にいる高齢者などに感染が拡がらないようにどういう対策をしていけばいいのかということです。この間の状況をみれば、ほぼ学校が介在してということはないとわかるけれども、学校再開当初は心配で、学校に子どもたちは入れないで、まず検温、それから手洗いも線を引いて1メートル以上の間隔をとって一人ずつ行いました。

司会　それは、先生一人ではできませんね。

笹川　一人ではできません。うちはスクールバスもありますから。だから6月は、勤務時間は8時10分なのに、7時半ぐらいから先生方は出勤する状況でした。先生方も覚悟してましたから、勤務時間について反対する先生はいなかったです。

　今は寒い時期になってきたので、手洗いも検温も中に入れて担任が取ればいいというようになってきています。再開当初は、それぞれの学校の違いはあるにせよ、多くの負担・労力がかかっていた状況はあったと思います。

　子どもたちの様子では、やっぱり登校しぶりみたいなところは増えているだろうと思っています。うちの学校で言えば、去年は完全に不登校という子は1人、登校しぶりという子は2、3人の名前が挙がってきている状況でしたが、今年度になってまったく来ないという子が3人、それから登校しぶりというところでは4、5人と増えています。

　それからマスクは必要だと思ってはいますが、弊害も多いと思っています。ある程度教師もベテランになってくると、子どもたちの表情を見なくても、動きとかしぐさで子どもたちの様子を掴めるけれども、若い先生などはクラスが落ち着かなかったりしている。やっぱり子どもたちの表情も見えないし、授業をやっていても聞いているかいないか掴めない。それからマスクだと声もこもって、先生はしっかり話しているつもりでも子どもたちのところまで届いていないこともあるだろうと思ったりします。

　今課題だと思っていることは、感染者が出たときのことです。大崎市内でもだいぶ感染者が増えてきました。うちの学校は、感染者が出たことは公表するけれども、学年とか誰かというのは一切非公表と決めてます。また、それぞれの学校で、そういう子が出た時に、どういう言葉をかけるのか。また周りの子どもたちにどういう言葉をかけていくのかという課題があると思います。

　教務主任としては、9月に感染者がだいぶ出てきたところで、コロナに対する偏見とか差別の問題を道徳の授業で取り組む必要があ

るということで、プログラムを組んで先生たちに取り組んでもらったりしました。でも1回きりの授業ではなかなかうまく行かなくて、結局〇〇ちゃんがコロナになったんだってよと、ラインで友達に流したことが分かって指導するようなこともありました。学校の中で、そういう問題に対して子どもたちにどう指導していくのか、現時点での課題だと思っています。

中村　授業面では、体育と音楽で、かなり制限がかかりました。体育は、他の授業もそうですが対面して作戦会議を立てたりとかは控える、しない。個人のスキルを磨くぐらいで、体育と言えないような授業をしろと言われて、納得いかないまま始めました。夏場とかはやっぱり熱中症があったので、運動時や休み時間に外で遊ぶ時はマスクをはずしてオーケーということを全校で決めました。今はもう作戦会議も、マスクをすればやっていいと先生方で決めて、チームでできるゲームのような授業も進めています。音楽も当初は、息を吐いて音を出す楽器はダメでした。タンバリンとか打楽器系のものも、結局いろんな人が触るから使用禁止と言われました。歌も歌ってはいけない。結局、手を打ってリズム遊びをするぐらいしかできませんでした。でも、今は楽器に関しては業務員の職員が譜面台にビニールのシートをつけてオリジナルのパーテーションをつくってくれたので、その前で一人ずつだったら音が出せるようにしたり工夫をして取り組んでいます。

学校全体としては授業優先で行事が減って、発達障害系の子たちの中には、落ち着いている感じの子もいます。やっぱり行事が近くなってくると、情緒系の子たちは落ち着かなかったりということが結構あったのですが、今年は本当に行事がまったくないので、むしろ落ち着いている。ただ他の子たちは発散する場所がないので、やはりフラストレーションがたまっているかなというところです。

司会　では、次に中学校の芳賀さん。

芳賀　学校再開になって、検温カードをずっと続けてますけど、最初のうちは玄関を入って1年、2年、3年とブースを分けて、ソーシャルディスタンスで順番に担当がみるようにしましたが、いざ教室に入るともう子どもたちは密になってしまって、あんまりこちらの方でいろいろ言っても現実にはダメなんですよね。校長もそういう状態を見て、学校は大丈夫だからということで、あまり神経質にならないでやれる範囲でやってます。私は理科担当なので、普通どおり理科室でグループを組んで授業したりしてます。でも隣の中学校は10月まで実験をしたことがないというように、学校間で差があるようです。

私自身が困っていることは、教室を離れると子どもがわからない。部活の後とか体育の後にマスクを取ってわっと動いたりすると全然わからないんです。目から下を見たことがないから。未だに1年生とかは、あれ、この子誰だっけ？　という状況があります。

あと学校が始まって2、3年生の子どもたちは部活動がやっぱり心配で、うちの校長は中総体関係の部会長なので、何とか3年生に正式の大会ではないけれど7月に交流大会を開けないかと提案して、それが通ったんです。ただ参加するしないは各学校の部にまかせることにしたら、うちの学校だとバトミントン部女子は全員不参加、男子は参加。男女で一緒に部活動していたのですが、部活動の中で割れてしまって、なんか中途半端な終わり方をした感じでした。

同様に生徒会活動なども5月早々に文化祭はしない、合唱コンクールもしないと決断してしまった。その代わりのものができないかということで、転勤してきた方や初任者、もともといる若手とかが中心で、韓国のオルレというウォークラリーみたいなものを参考にして企画を立てて、10月17日の土曜日にやりました。保護者にも交通安全で立ってもらったり、お昼に芋煮などをごちそうしてもらっ

たりと、親も巻き込んだちょっと大きな行事をしたんです。子どもたちは全部で10数キロ歩く1日がかりの行事だったんですが、男子の生徒会長は終わってワーワー泣きながら帰って行って、満足したのかなあという感じでした。

司会　修学旅行とかは、どうしましたか。

芳賀　うちは、いつも5月のゴールデンウィーク明けに東京方面で自主研修とかをやるんですがずらして、結局場所を鬼怒川温泉、日光周辺に替えて2泊3日でやりました。野外活動も蔵王を使って時期をずらしてやりました。不登校の子も参加しました。でもその後はまた元に戻りました。

日下　私の学校では8月末に文化祭をし、9月に修学旅行とか野外活動も2泊3日でやって、10月には合唱コンクールもしました。規模を縮小したり準備期間を短くしたりしましたが、行事をすると不登校気味の子たちが出てきたり、不登校の子も修学旅行に行ったりして、すごく楽しく過ごしました。その後は続かないのですが、そういうことを共有できたのはすごくよかったと思いました。私の立場的にはすごく心配で、本当にやっていいのかとか、1泊にしたらいいのではないかとかずいぶん言ったりしたんですけど、やらせたいという思いが校長にも強くあって、いろんな対策をしながらやりましょうということでやったんです。養護教諭としては心配な部分もすごくあったんだけど、子どもたちにとってはよかったのかなと思ってます。

司会　やっぱり行事がないのは、子どもにとっても先生方にとっても、教育上いろんな意味で非常に困ったんじゃないかと思いますね。

小野寺　再開して生徒たちは、制服だと飛沫が付くとか、ジャージの方が洗濯しやすいということでジャージ登校。給食の配膳も今までと違って、食べるのも全員黒板を向いて。グループをつくれないので、したがってグループ学習もない。ペア学習もない。個人の学習です。家での課題を提出させてるようですが、ちゃんとやってくる子とほとんどやってこない子がいます。つまり学力差が大きいために一律の課題はできないんです。自学できる子はちゃんとやってくるんです。やっぱり学力がなくてハンディのある子は、そこで学力が開いてますね。今授業をやっていても、すごく差を感じます。

あと発達障害系のＡＤＨＤとかＬＤとか、そういう子が普通学級にいるんですが、そういう子にケアできない。コロナに関係なく、人的にも足りていないんですが、そういう子たちがかなり苦しい状況になっているんじゃないかと感じます。言語的なつながりが持てる子はいいのですが、知的な障害を持っている子たちは、言葉を持たないんです。だから支援員の先生にペタペタくっついて行ったりするんだけど、身体接触ダメよ！　みたいなね。そういう子たちにとってはすごくしんどいと思います。

司会　養護教諭から見て、再開してからはどうですか。

賀谷　再開前後で、校内の感染症対策のマニュアル作りをしました。日下先生とか先輩方からいろいろ情報を仕入れながら、他の学校の状況とうちの学校の状況を加味しながら何回作り直したかわかりません。まず朝の検温から、それから手洗い場の設定は今までの数では足りないため、特別教室の水道も全部使いましょうとか。あと使用時間も一斉に並ぶのはまずいから、じゃあ5分ずらして授業もちょっと早めにしてみましょうとか、休み時間も早めに切り上げてグループ作ってやりましょうとか。掃除の仕方、給食の配膳、発熱者の対応、特別教室はどういうふうに使うか。それから下校後の学校の消毒についてなど全て文章化して作って、確認してやりました。それはすごく大変でしたね。

転勤して来た先生とか新任の先生は、やっぱり現場自体が分らないこともあって、まず

全員同じ方法でやりましょうと揃えるのが、結構大変だったと思います。

今は慣れてきたのでだいぶいいのですが、相変わらず下校後の消毒とか、掃除は子どもたちに水拭きはさせていないし、トイレ掃除も手洗い場もさせてないので、教員の負担は変わらないです。

休校中、やっぱり昼夜逆転とか運動の機会が減ることで肥満が増えそうだと思っていましたが、うちは予想したよりも肥満は増えてなくて、逆に痩せたという子が実はいました。そこは思ったよりも問題はなかったです。不登校も、うちは出て来られなかった子が出てきたりして増えてないです。不登校傾向の子は、相変わらず欠席がちみたいな感じです。

現在の課題として感じているのは、差別とか偏見ですよね。何が一番怖いかと言ったらコロナにかかることより、かかったことで何を言われるかわらないことです。

それから、コロナに対する個々の家庭での意識の差や対応の違いが、子どもたちの関係とかにも影響して来年、再来年に出てきそうだなと心配しています。

司会　具合悪いという子が増えたとかは？

賀谷　保健室の来室者が増えたとか、そういうことは今のところありません。

司会　では、中学校の日下さん。

日下　学校にもよると思いますが、うちの学校は手洗いをしっかりすればいいということで、生徒も掃除をしてますし、昼休みのボール遊びとかもやってます。でもどれだけ徹底しているかわからないです。手洗いしても、結局ハンカチ持ってきてても使わないでいる子もたくさんいるので。意識付けかなと思ってやってます。ただ手洗いとか換気をしっかりするようになったせいか風邪とかあまり流行ってなくて、この時期になっても来室する生徒は今までに比べてずっと少ないです。

学校の対策は、それぞれ担当ごとにするのは効率悪いし、まとまらないだろうというので、生徒指導部に中心になってもらいました。関係の先生方で集まって会議を何回かして、教員向けのマニュアルとか生徒向けのマニュアルをまとめました。休校になってすぐの時は、本当に一人で抱えて悩んでいたので、学校全体でやるといいなと思いました。今後の課題としては、感染者が出たときの対応ですね。

司会　感染者が出た時の対応は、教育委員会の方から出たりしていないのですか。

笹川　濃厚接触者が出たら、感染した子は2週間出席停止。臨時休業の期間は何日にして消毒は必ず入れるとか、そういうマニュアルは来ているけど、その後の子どもたちの心のケアとか、どうするかなどは出てないですね。

日下　いじめにならないように十分配慮しなさいという程度ですね。

◆子どもたちの成長・発達を保障するために
～大事にしていること・したいこと～

司会　コロナ禍の中で子どもたちの成長・発達をどう保障していくか。私はこれが大事だと思うからこうしているとか、何かそういう話ができればと思いますがどうですか。

日下　学校再開時には、感染症の恐れのある子は学校に来てはいけません。すぐ帰しましょう。保健室で休んでも1時間であとはすぐ帰しますとか言ってましたけど、いざ始まってみると、そんなことはできないと思いました。やっぱりじっくり子どもの話を聞いてあげたり、子どもに寄り添ってあげなくてはいけないと思います。大体は心の問題で保健室に来ることが多いので、マニュアルにあるとか、決まりだからと言って乱暴に帰してはいけないと思っています。そういう点は、先生たちにも理解してもらっています。

中村　私も「あれをしてはダメ」「これをしてはダメ」という形で学校が始まったので、作文や話をする機会をつくって、子どもたちの本音を書かせたり出させたりするようにしています。子どもたちなりにいろんなことを思ったり考えたりしていて、私の方がいろいろ教えてもらっている感じです。

笹川　私は教務主任なので、来年度の教育課程をどう編成していくかというところで、やっぱりウィズコロナの観点で来年度の教育計画は組んでいく必要があると思っています。そういう点で感染対策をどうするか、学校行事をどうするか。今年は運動会と修学旅行は行いましたが、学芸会や他の特別活動、学校行事はほぼ削りました。子どもたちの成長と発達を考えると、勉強だけではない取り組みをしていく必要があると思っています。9月から月1回、たてわり活動を再開しました。先日、たてわりでお祭り遊びをして、6年生も

生き生き活動してました。これまでなかなかリーダーになって活動する機会がほとんどなかったので1年生、2年生と関われてよかった。子どもたちの中で計画して、ある程度マスク着用とソーシャルディスタンスを確保するなかでの遊びを子どもなりに考えて、結局密になってしりとりとか頭突き合わせながらやっているんですけどね。そういうことも認めながら子どもたちを育てていくことが大事なんだろうと思います。

それから学校行事を持つにしても保護者の意識や考えは様々です。いろいろアンケートを取ったり対策をして修学旅行をしましたが、一人参加しませんでした。そこは保護者の判断なので仕方ない面もありますけど、やっぱり保護者の思い、声も聴きながら学校行事を見直して行ったり考えていったりしなくてはいけないと思っています。

芳賀　養護教諭と話をしたら2年生が、1年生のマナーが全然なってないと怒っていると言うんです。考えてみれば部活動のスタートも遅かったし、3年生はあっという間に引退してしまった。1年生は、2年生が3年生に接している様子とかを見てないし、2年生も1年生をどう扱っていいかわからない。それで2年生は、1年生がさっぱり話を聞いていない、言うことを聞かないとイラついていているようなんです。それは学級にも反映していると思います。クラスの中でみんなで話し合ってどうこうするということが、うちの学校に関しては、さっきのウォークラリーの行事をもってほぼ終了なんです。クラスの中でみんなで決めて、みんなで何かしようよというものに持って行けない状況なんです。もっと話し合い活動なんかも入れながら組織して行かないとダメなんではないかという気がしています。

司会　話し合いの中で生徒たちは成長したり人の気持ちがわかるようになるのに、密になるなということで、そういうことができない。小野寺さん、どうですか。課題みたいなものは？

小野寺　私が教えているのは美術ですが、そこにもやはり文化状況が反映します。子どもたちも我々もそうですけど放射性物質の学習をしたのと同じように、コロナに限らず人類の感染症との闘いの歴史と科学を学んでいくことが必要です。科学的な視点と歴史・文化の流れを縦軸・横軸として、教育を文化の中で見ていく。そこに立ち返っていかないと、狭い学校教育の中だけではいけないと思います。学校に来る来ないは確かに大きな問題かもしれない。学力を保障するのはわれわれの責務です。だけど、子どもたちをめぐる社会状況にもちゃんと目を向けていかないとこの問題は絶対に乗り越えられない、でもいつかは乗り越えられると、私は思います。そういう希望を子どもたちに持たせないといけないです。

◆子どもたちの授業と教育のＩＣＴ化をめぐって

司会　気になっていたことの一つはコロナ禍のなかで子どもたちが手洗いとかうがいとか密になるなとか、管理や躾の対象になっているということです。子どもたちが主体になるような、コロナに向き合える子どもをどう育てるのか。そのためには小野寺先生も言われたような学習が必要だろうと思います。

それからもう一つ気になっていることは、このコロナ禍に乗じてＩＣＴ教育が一気に学校現場に導入されようとしていることです。そういう方向に行くことによって学校はどうなるのか、教師の役割はどうなるのか。人間を育てる教育はそれで大丈夫なのかということです。

またセンターが行ったアンケート調査には、休んだ授業時数の遅れを取り戻すために一方通行の過密な授業が行われて、子どもたちは楽しくないし格差が生まれているという記述もありました。その辺のことをもう少しお聞きしたい。

日下　授業には全然関わっていませんが、人類はこれからもずっと感染症とともに生きていかなければいけない、闘っていかなければいけないので、これを機会に私たちの生活を変えていくような取り組みをしていく、そういういい機会にしていく必要があると思っています。

それから学校がすべき役割として、やっぱり感染症が広がらないような学校をハード面としてもつくっていかなくてはいけないと思っています。例えば施設・設備で言うと、これから寒さが厳しくなっていく中で水しか出ない蛇口ではなくて、お湯もでる蛇口が必要だと思いますし、少人数学級にしていくこ

とも必要です。これを機会に学校が感染症を意識して見直さないといけないと思います。

笹川　オンライン化で言うと、この間、市議会で予算がおりたので、来年にはタブレットが一人1台ずつ来ます。今、学校ではコロナの中でただでさえ教室はいっぱいなのに、どこに38台のタブレットの保管庫を置くんだという話になってます。すでに置く場所がなくてオルガンを廊下に出しているのにどうするんだという状況です。

それからデジタル化については教育の本質とかけ離れた方向に進んでしまうのではないかと危険性を感じてますが、先生方は意外と安穏としているところがあります。使える時に使えばいいんでしょぐらいで来るならいいですけど、そのうちどういう時に使ってますかと報告を求められたり、矢継ぎ早に使用計画を立てろなんていうことがどんどん来たりして、やっぱり大変になってくるんだろうと思っています。ただ不登校の子などが、例えばタブレットで教室の様子が見られたり、授業に参加できたりというのであれば、いい方向性もあるんだろうとは思いますけど、学校そのものが今後オンライン教育に対応した授業になるとは考えてないです。

中村　オンラインとかは、うちの学校はまったくしてません。休校中もすべて紙媒体でしてきました。やっぱり目の前で向き合わないと授業はできないかな。一方的な授業はしたくないです。

司会　芳賀さん、中学校はどうですか。

芳賀　うちの中学校は来年2月にタブレットが入ると言ってたんですが、以前は1クラス分だけと聞いたような気がするんですが、つい最近全部と言ったような気もします。あと近隣の中学校には、全クラスにデジタル黒板が入って、タブレットが入ってという感じなんだそうです。

笹川　過密な学習状況という点については先日、教務主任者会があって、学校の状況などを聞いていると、1、2年生は矢継ぎ早に進んでて、うちの学校もカリキュラム的にいうと、6月にスタートして大体10月にはほぼ通常の進度に戻っている状況です。それだけでなくて、1、2年生は教科書も後半終わりつつある。私は、そんなに焦る必要はないよと言っているんだけれども、先生方の中で早く進めなくてはいけないという焦りが大きいと思っています。後々その弊害は出てくるだろうなと思っています。それから他の学校などの話を聞いてみると、授業時数を確保するためにかなり無理をしている学校もあるように聞いています。例えば午前5時間授業という話も聞くし、それから放課後に学びの学習みたいな形でやっている話も聞きます。あとは学力向上というような観点からきちんとやっているかということが指導主事訪問で言われたりしているということも耳にします。

そういう状況が、一方であるんだろうと思います。

司会　今日の座談会で、先生方がこの間、不意のコロナ禍で、随分試行錯誤しながら取り組まれてきた様子を知ることができました。

こうしたコロナ禍の状況を考えると、収束後の教育がどういう方向に変わっていくのか、変えられていくのかが心配にもなります。

コロナに対処する「新しい生活様式」に沿った子ども管理（躾け）と「密（関係性）」を避ける教育作用、スタンダード化した内容をＩＣＴ活用で一方向的に個別化する学習が進められるのではないかという懸念です。

もともと、学校とはどういう場なのか、人間を育てる教育とはどんな仕事なのか、今日の話し合いを踏まえて、センターでもその辺の考えを更に共有していきたいと思います。

今日の話し合いをもとにセンターでも、今後のコロナ禍の学校教育ついて検討し、現場のみなさんや、宮城の子どもたちに還元できればと思います。本日は長時間有り難うございました。

コロナ禍での高校教育の現状と課題

豊永敏久

私が勤務する高校は、卒業生の大多数が国公私立の４年制大学に進学する、いわゆる進学高校の一つである。コロナ感染拡大で今年度の授業開始が６月にずれ込んだことは、大学入試に向けた学習時間の確保を難しくしたという意味で、進学高校にも大きな影響を与えている。

大学入試制度は今年度から大きく変わった。秋に実施されるＡＯ入試や推薦入試は（今年度から各々「総合型選抜」・「学校推薦型選抜」と名称が変わり）、これまで以上に高校在学中の活動成果（部活動・ボランティア活動・探究的活動・留学経験など）が重視された。また来年１月中旬に実施される大学入試センター試験は（今年度から「大学入学共通テスト」と名称が変わり）、これまで以上に思考力を要する問題が出題されることになっている。しかしコロナ感染拡大で授業開始が２ヶ月遅れたにも関わらず、入試の日程は基本的に予定通り（変更なし）である。総合型選抜の出願が約２週間繰り下げられるなど、わずかの変更があったに過ぎない。大学入学共通テストではコロナ感染に配慮した「第２日程」が（従来の「追試」と併せて）２週間後の１月下旬に設定されたとはいえ、その後の国公立大学の二次試験や私立大学の入試日程が変わらないので、実際にはほとんど利用されていない。

コロナ感染拡大の前からオンライン授業の環境が整っていた一部の私立高校では影響をほとんど受けず４月から淡々と授業を開始できた例もあるが、環境が整っていない公立高校はまともに影響を受けている。私の勤務校でも夏休みを大幅に短縮したが、２ヶ月の遅れを取り戻すには到底足りない。学習の遅れがこの時期になって顕著になり、授業は当然ハイスピードとならざるを得ず、３年生のストレスは例年より深刻になっている。私は当初から授業時間の不足を予想して、自発的に３年生だけ授業の説明を録音し（動画ではデータ量が巨大になるため敢えて避けた）、音声ＭＰ３と資料ＰＤＦのデータを臨時休校中の５月からネット配信して「各自スマホで聴講する」よう指示した（冬休みにも最終章の録音を配信の予定）ので、形の上では進度に大幅な遅れはないが、生徒にとって「ネット配信のデータを私物のスマホにダウンロードして音声と資料を同時に再生・表示する」という作業は不慣れで難しかったらしく、知識の定着という点では期待した成果がみられない。

もともと教科書の情報量は年々増加傾向にあり、生徒の負担は重くなる一方である。例えば公民「倫理」に登場する人物は、私が高校生だった40年前は約80人だったが、現在は２００人にも及ぶ。標準単位数（１週間の授業時数）は昔と同じゆえ、単純に倍以上の濃さで勉強しなければ高得点は望めない。「日本史」・「世界史」はもちろん、理科の教科書も昔より分厚い。しかし３年生は今年度も年末に教科書を終えなくては共通テストに間に合わないから、特に３年生で初めて履修が始まる受験科目（例えば「倫理」・「政治経済」や数学・理科の発展科目）は、本来なら１年間の学習量を約半年で済ませる計算になる。３年生のストレスは尋常ではない。

コロナ感染拡大の前から、私は大学入試の時期を遅らせて３年生の学習時間を確保すべきと思っていた。４月ごろ大学の「９月入学」の議論が沸き起こったとき、私は絶好の機会と捉えたが、様々の事情から立ち消えてしまったのは残念である。オンライン授業の環境整備はもちろん、対面授業とオンライン授業との連携（例えば複数クラスの授業をオンラインの一斉授業に代えられれば多忙化解消にも個別指導充実にも資するはず）、そして学習内容の精選。これらについて今こそ真剣に検討を始めるべきと私は考える。

（宮城野高校）

対面授業の難しさとありがたさを感じて

～コロナ禍の専門高校の日々～

山屋　勇一郎

通常とは大きく異なった今年度は、私にとってきついものがあったが、それ以上に新年度がスタートし、学級開き・授業開きを経て学校生活や学習活動になじんでいくはずであろう4～6月の時期に、教員のアドバイスや友人との協働活動のないまま課題をこなさなくてはならなかった生徒たちは、もっと苦労したに違いない。

6月の再開に向け5月後半から分散登校が始まったが、感染のリスクを恐れて登校できない生徒も多かった。しかし、大半の生徒が以前と変わらない様子で登校し、生徒の表情を通じ改めて学校で生活を送ることの必要性を感じた。

イレギュラーな状態でスタートした学校生活は慣れないもので、6月に学校が再開してからは生徒・教員共に疲労感のある日々を過ごした。生徒は家庭中心の生活から学校中心の生活にシフトするのに苦心し、教員は授業と平行して休校中の課題を採点するのに忙殺された。やがて、授業も軌道に乗った頃に今度は土曜授業が入ってきた。私にとっては約20年ぶりの土曜の〝半ドン〟が戻ってきたわけだが、懐かしいというよりも「苦しい」1か月であり、生徒の顔も疲労感が漂う1か月であった（本校では6月中に4回土曜授業を実施した）。

そして徐々に気温も上がり、猛暑の中の授業に突入した。予算が付き各クラスにウインドーエアコンが設置されたが焼け石に水であった。この直後に県がエアコン設置を決めたが、「もっと早く動いてほしかった」というのが正直なところである。ちなみに、数年前に受け持った生徒が「お金出すからエアコン設置して！」と要望したことを思い出した。猛暑は今年に始まったことではない。

私も生徒も何とか猛暑を乗り切り、8月頭から短い夏休みに入った。例年この時期には多くの部活動で大会が行われ、私も引率などに奔走していたが、今年は大会が中止となり、生徒共々気が抜けた夏休みだった。

その分充電できたからだろうか、夏休み明けからは例年とほぼ変わらない学校生活になったような気がした。暑さは相変わらずであったが、休み明け直後に行われた球技大会は、例年通りの盛り上がりを見せ「〝密〟になってるのを注意しないんですかねぇ」というぼやきも聞こえた。感染者が出なかったのが幸いであった。その後、文化祭は校内発表、各種集会は放送で実施と規模を縮小して行われたが、生徒は主体的に活動しており、状況が変わっても生徒の生き生きとしている様子を垣間見ることができた。

以上、学校再開からの本校の概要を思いつくままに書いてみたが、高校現場では他校とあまり変わらない状況ではなかったか、と思う。しかしこの中で本校では「臨時休業中、教員がどう動くべきか、何をすべきか？」という指示がなかったり、土曜授業を実施する際、振替休業日の設定まで考えられていなかったり（結果的には設定された）、場当たり的な対応も多かったように思う。

6月の再開当初、昼休みの水道前に長蛇の列ができたが、徐々にそれもなくなり例年と変わらない状況になった。私の授業もお互いにマスクを付けて行っている以外は平常に戻った感がある。専門教科はどうだろう、と科長に聞いてみると、「特に何もしていないですねぇ」との回答（とはいえ、手指消毒・マスク着用・換気・使用後の次亜塩素酸水による消毒は全校で実施している）。農業や水産系の学校も同じであろうが、モノを扱う実習では工夫・配慮には限界があるのだろう。

何はともあれ、早くこの状況が終息し、今までのような学校生活が送れることを願って止まない。この状況ではなかなか生徒の顔が覚えられないのである。物覚えの悪い私にとっては、頭の痛い日々が続く。

（県工業高）

授業報告（小学校）

新型コロナウィルスの授業

矢部　智江子

1．はじめに

新年度が始まり学校が再開するまでの2ヶ月、職員室では、過剰なまでのウィルス対策が話し合われていました。私の勤務校は、全校67人の小さな学校で、担任する5年生のクラスも10人（特別支援の子どもが2名）ですから、そんなに密になることはありません。それなのに、子どもたちが学校に来たら、話もしてはいけないような指導を求められていました。

私は今まで、インフルエンザ流行の時も、マスクをせず、手洗いや消毒は人体常在菌のバランスを崩すものだと思っていたので、積極的にしたことはありませんでした。ところが、新型コロナが流行り、否応なく、マスク・手洗い・消毒が強制され、とても違和感を感じました。そしてそれがあたかも、絶対的な「正義」のように語られ、強制されることに嫌悪感を感じました。

そうしたときに、朝日新聞に掲載された《自粛とは、自らの判断で、慎めばよいのであって、誰かに強制されるものではない。(中略)我々はいま、新型コロナウィルスより恐ろしい「正義」という伝染病に立ち向かう勇気を持つべきなのだ。》という真山仁さんの文章に触れ、とても心を動かされました。また、大塚英志さんが、《コロナ禍で蔓延した「自粛」や「新しい生活様式」や、そこにへばりつく「正しさ」がとても気持ち悪い。けれど「気持ち悪い」と言いづらいような社会の空気がもっと「気持ち悪い」。「あなたはその時どう行動したのか」と問われたら、「反対できる空気じゃなかった」と弁明するのでしょうか。生活という個人の領域に、不用意に公権力が介入してくることを「おかしい」と思うのは、民主主義の基本です》と書かれていたのを読み、そうだそうだと納得し、この状況に、自分ができる範囲で抵抗しなければならないと思ったのでした。

そのため、まずは基本的な「手洗い、マスク、ソーシャルディスタンス」についての科学的な知識を学習し、子どもたちが納得し、自分で判断して行動できるようにしよう。そして気をつけなければならないことはあるけれども、必要以上に怖がることはないことも教えたいと考え、全体計画は、①手洗い、マスク、ソーシャルディスタンスについて（学活で2時間）、②アンケート（学活で1時間）、③免疫について（保健で2時間）、④コロナ差別について（道徳で1時間）、⑤コロナ新聞づくり（国語で1時間）の7時間扱いとしました。

2．第一次の授業

学校再開後、最初に行った第一次の授業は、手洗い、マスク、ソーシャルディスタンスという3つの対策をなぜしなければならないのかについて、パワーポイント資料と学習カードを作り、クイズのように問いを出して、対話をしながら進めていきました。（以下○数字は回答数）

新型コロナウィルスとのつきあい方

1．新型コロナウィルスについて、どう感じていますか。

A．うつるのではないかと、とてもこわい　⓪
B．うつるかもしれないので、ちょっとこわい　⑤
C．うつるかもしれないが、あまりこわくない　④
D．うつらないと思うので、こわくない　⓪

2．新型コロナウィルスについて、知っていること、疑問に思うこと、知りたいこと、感じていることなどを書いてください。

・ワクチンがない。
・東京渋谷の一部の人が、自粛要請中に外出している。
・岩手県は感染者がゼロ。
・東京で毎日感染者が出ている。
・クラスター。
・レムデシビルは、有効なのか。
・もし家族の誰かがコロナに感染したら、治るまで会えないのか。
・マスク不足はいつまで続くの。
・なぜコロナという名前なのか。
・死ぬ人がいること。
・どうして後から症状が出るのか。

3．マスクをつける1番の目的は、何だと思いますか。

A．ウィルスをひとにうつさないため　⑦
B．ウィルスをうつされないようにするため　②

4．マスクのあみ目とウィルスでは、どちらが小さいと思いますか？

A．マスクをして、うつさないようにするんだから、もちろん、マスクのあみ目の方が小さい。（ウィルスはあみ目より大きい。）⓪
B．だいたい同じくらいの大きさ　③
C．だんぜん、ウィルスの方が小さい　⑥

5．おしゃべりやくしゃみのつばは、どのくらい遠くに飛ぶと思いますか？

A．10ｍくらい ⓪　B．5ｍくらい ③
C．2ｍくらい ⑤　D．30ｃｍくらい ⓪

6．Bさんはどうしたら、感せんしてしまうでしょうか？
A．ボールをさわったら、感せんする ⓪
B．ボールをさわった手で、口や鼻をさわったら、感せんする ⑨

7．手洗いは、次のどれがいいでしょう。
A．水洗いで、20秒 ⓪
B．石けんで20秒 ①　C．消毒だけ ②
D．石けんで20秒洗った後、消毒 ⑥

8．今日勉強で、分かったこと、分からなかったこと、疑問に思ったこと、知りたいことを書きましょう。
・コロナは、飛沫感染が多い。
・コロナは、どのくらい集まったら見えるのか。
・6月19日以降は、東京からも来るということ。
・他の県の人は、6月19日以降、来ていいことが分かった。
・6月19日まで、他の県には外出してはいけないのが分かった。東京は、感染を防げるようにして欲しいです。これからも感染しないように努力したいです。
・ウィルスは、めっちゃ小さいことが分かった。
・ウィルスは、ちょっとこわくなった。早くおさまればいいな。
・たくさん質問して、たくさん先生が答えてくれて、気持ちよかった。たくさん質問して、楽しかった。
・何で油のまくでできているのか、知りたい。

この時点では、宮城県の感染者はまだ少なく、学校のある大和町はゼロだったので、子どもたちは、そんなに怖がってはいませんでした。ウィルスがとても小さいことを知り、驚いていましたが、その他のことについては、あまり意外性はなかったようです。6月19日から他の県からも移動できるということに反応し、これからの感染拡大を心配していました。

3．第二次の授業　アンケート

この授業で終わろうと思っていたのですが、私が参加している体育同志会の仲間から、続きの授業を是非して欲しいという要望があり、子どもたちの思いを更に詳しく探ってみることにしました。その時、子どもたちに書いてもらったアンケートとその結果です。

1．あなたが、コロナウィルスに感染してしまったら、自分はどう思うと思いますか。
・いじめにあうと思う。
・やばいと思う。
・おじいちゃん、おばあちゃんが感染しないか心配になる。
・家や病院で安静にしていなきゃな。不要不急の外出はひかえる。
・死んでしまうと思う。さびしくなる。
・みんなに差別されそうでこわい。誰かに移してしまうのが、こわい。
・早くなおりたいから、入院してベットでねている。
・死ぬのかな。何か言われるかな？
・うつっちゃったよー。

2．クラスの友達が、感染してしまったら、あなたはどう思うと思いますか。
・えー。
・だいじょうぶかな、死なないかな。
・私が悪いってなっちゃう。
・ちょっと、軽べつ、差別してしまうかもしれない。
・最悪だと思う。
・自分にコロナが、うつるかもしれない。
・しっかり安静にして、不要不急の外出はひかえて、元気でいてほしい。
・自分も感染していないか、不安になると思う。
・自分は感染していないから、まあＯＫ。
・いじめられる。

その他にもいろいろ質問はしたのですが、気になったのは、コロナにかかったら差別されるのではないかと思っていることでした。

なぜ、子どもたちは、コロナウィルスに感染したらいじめられる、差別されると思っているのか、その原因を考えてみると、

①コロナウィルスに感染したら、みんなに迷惑をかけると思っている。
②コロナウィルスに感染することは悪いことだと思っている（予防が足りなかった。不注意だった。しっかり自粛していなかったなど）。
③自分が感染したら、周りの友達にもすぐにうつしてしまうと思っている。
④自分の体に免疫力があることを知らない。
⑤子どもは重症化しにくいことを知らない（感染したら、重症化すると思っている）。

と考えました。

それで、自分たちの体には、免疫という働きでウィルスをやっつける仕組みがあること、子どもはその免疫力が高いこと、子どもは重症化しにくいことを学ばせたいと、資料を作り授業を行いました。

4．第三次の授業　免疫の学習

主な発問は次の5つにしました。

1．治療薬がまだないのに、感染して治った人は、どうやって治ったと思いますか。
2．鼻の穴から、ウィルスが侵入しました。みんなの体は、どんな反応をするでしょう。
3．口からウィルスが侵入しました。みんなの体は、どんな反応をするでしょう。
4．鼻や口から入ったウィルスが、体の中に入ってしまい、熱が出てきました。どうして熱が出ると思いますか。

5．どうしたら、（免疫力）が下がってしまうと思いますか。

授業は手作りの教具と中山教授とタモリのＮＨＫの映像で免疫の仕組みを説明しながら考えさせました。

子どもの感想（抜粋）

・熱がないと、敵（コロナ）と戦えないということが分かりました。あと、できるだけ薬を飲まないようにしようと思いました。良くなる力を消してしまうので、飲むときは気をつけます。
・コロナウィルスは、細胞を通り抜けることが分かった。
・免疫力をいっぱいあげて、コロナに負けないことをする。熱を上げて、下げないために、そんなに薬を飲まないようにすることが分かった。
・血管には、こんなに細胞がいるとは知らなかったです。これからも睡眠不足やご飯を食べない、運動不足にならないなどに気をつけていきたいです。そして、新型コロナウィルスに気をつけていきたいです。マイナス思考にも気をつけていきたいです。

5．第四次の授業　差別の授業

自分たちの体に免疫力という力があることを初めて知り、少しは安心したようでした。

だからと言って、差別に対する心配はなくならないと考えました。それで、次の時間には、差別そのものについて、道徳として授業をしようと考えました。

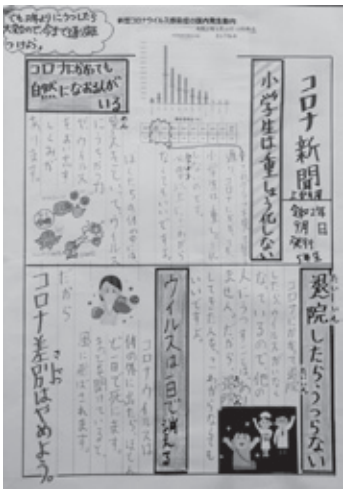
0．10代は重症化しない（データから説明）
　では、重症化しないから、感染しても良いということかな？
・だめ。病院が大変になる。
・お年寄りにうつしてしまったら大変。
・学校も休みになる。
・家族にも会えなくなる。
1．第2次のアンケートから
2．いじめられる、差別されるとは、どんなことをされると心配なのか。
3．実際に差別されたり、いじめられたりしているのか。
　岩手県の第1号の人の新聞記事紹介
4．普通のインフルエンザにかかっても、いじめられないのに、なぜ、新型コロナだといじめられるのだろう。
・みんなに迷惑をかけるから。
・学校を休みにしてしまうから。今は2～3日休んだら、すぐに学校が再開される。
・他の人にうつしてしまって、その人が重症になってしまうかもしれないから。
5．感染したら、いじめられるとか、差別されると心配になると、どんな悪いことが起こってくるだろう。
・熱が出ても、検査を受けない。
・具合が悪くても、黙っている。
・熱が出ても、そのまま会社に行く。さらに感染を拡大させる。
6．感染していじめられたら、どんなことが起きるだろう。
・コロナでは死なないのに、いじめられて、学校にこられなくなったり、自殺したりするかもしれない。
7．新型コロナへのいじめや差別をなくすために、どうしたらいいだろう。
・ポスターをはる。
・コロナにかかった子がさけられたりしたら、自分たちが友達になる。
・学校側と保護者とみんなで協定を作る。破ったら、厳格に対処するか、激怒する。
・こそこそ話を聞かない。
・学級新聞で知らせる。
・先生が差別しないように注意する。
・毎日、家に帰ったら、手洗いと消毒をする。
・みんなに差別をしないように呼びかける。

■授業後の感想

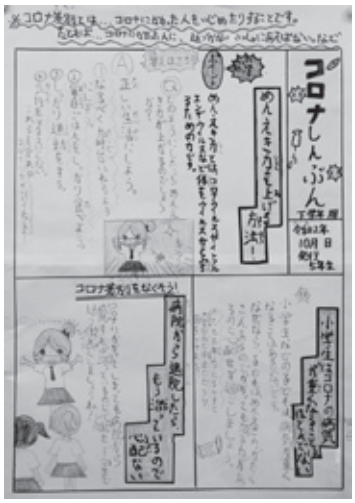
・コロナウィルスは、何から始まったか知りたい。
・コロナの勉強をして、すごく分かったなあと思いました。
・なんで全国（日本）で、アベノマスクを配布したのか。必要な人だけにやればいいのに。必要な人だけというのは、むずかしくて、大変だったのかな。
・なぜ新型コロナウィルスで人は死ぬのか。
・コロナになりたくないのに、なってしまって、さらに差別をされて、かわいそうだなと思った。
・コロナは何から始まったのか分からない。
・そういう風に差別があることで、やっぱりこわい。なぜ人間の方がコロナにかかりやすいのか。
・新型コロナウィルスで、いじめられていることが分かった。新型コロナに気をつけたい。
・みんなに差別しないようにしようと思った。早くコロナウィルスが収まって、差別も無くなって、元気でいたい。差別している人も、こわくてやっているのかなと思った。

最後に差別をなくすために、学級新聞を書いて知らせるということになり、上学年用と下学年用の2枚の壁新聞を書きました。

（大和町・鶴巣小）



コロナ新聞上学年用



コロナ新聞下学年用

読書のすすめ（第2回）

春日　辰夫

○『いのちの小さな声を聴け』水上勉・灰谷健次郎著　1993年　新潮文庫

水上・灰谷の往復書簡集。排水路変更と新設河川工事を見て、そこが亀の群棲地だったので驚いた水上が、正月早々、亀が死ぬ夢を見た話から往復書簡は始まり、２００メートルを４０分かけて歩いた少女のその後についての灰谷の話で終わる。

私にとっての水上勉は『飢餓海峡』など多くの小説だけだったので、本書の他に、自伝的教育論と付した『ものの聲　ひとの聲』（小学館）など小説以外を読むことで水上勉のベースになった自然観・人間観を知ることは大きな収穫だった。

灰谷について書く必要はなかろうが一つだけ添える。『優しさとしての教育』（新潮社）に「わたしにはある人生の挫折から放浪生活が１、２年あるのだが、そこで自分の人生は子どもに救けられてあったと気づき、それが『兎の眼』を書かせた」と書いており、私はそういう場を職としているのだと自分自身をあらためて思ったことがあったことを。

○『子どもの本から世界をみる』石井郁子他著　2020年　かもがわ出版

詩人・長田弘に『本という不思議』（みすず書房）がある。そのなかで長田は、「だいたい本というのは、知ってから読むのではなくて、知らないで読む。門前の小僧習わぬ経を読むという仕方で読みだすものなのです。そういうことで言うと、今日、本を読んでいないのはむしろ大人とよばれるひとたちこそではないだろうか、と思える。この本がおもしろいという大人たちの声が、いつか門前の子どもたちの耳になかなか入らないようになってしまった」と書いている。

手渡すべき大人が読まないからだと言われて、大人はどうする！　そう、子どものためにもさっそく読まなければならない。簡単なことではないが……。その橋渡し役に編まれたと言っていいのが本書『子どもの本から世界をみる』だ。並外れの読書好きグループによる「子どもとおとなのブックガイド８８冊」。この案内書は、さいわい、読んでもわかった気にはならない（？）ので、「手に取ってみよう」という気が膨らむ。そう、大人（教師・親…）が、まず、このガイドを信じてそれらの本を読んでみよう。そういう大人（教師・親…）によって手わたされる本を、たくさんの門前の小僧が待っている！

※これらの本はセンターにあります。お読みになりたい方には貸し出します。

おすすめBOOK

やっとでた！貴重なコロナの教育実践

センター代表運営委員　数見　隆生

矢部智江子先生の実践は、全国的にも貴重で大事な取り組みです。コロナ発生から約10か月、全国の子どもたちの多くは、家庭でも学校でもコロナ管理の対象にされてきました。

本号の座談会にもあるように、この間「コロナ禍の教育のあり方」の見直しは少しずつされつつありますが、「コロナに向き合う子どもをどう育てるか」のまさに教師・教育がやらねばならない仕事に取り組めていない状況に、私は歯がゆさを感じていました。

この実践の特徴は、次の3つの観点から子どもらをコロナに向き合わせ、その主体に育てようとしている点です。まず第一段階は、現実（「新しい生活様式」）の根拠性に発問を通して向き合わせている点です。これは、単に躾として従わせているだけの教員にはできないことです。子どもらは、「たくさん質問して、先生がたくさん答えてくれて、楽しかった」と感想を書いています。第二段階は、免疫の学習（からだの科学）と向き合わせ、くぐらせている点です。「薬もまだないのに、感染した人の多くが治っている。どうして？」「鼻や口から入ってきたウイルスに、自分たちの体はどう反応してる？」と問いかけ展開しています。そして第三段階では、「壁新聞づくり」を通して社会に生きる主体者としてコロナに向き合わせています。学校という小社会の仲間に、学んだ「知恵」を発信させているのです。コロナ社会に対峙できる子どもの育成を、この実践から大いに学んで欲しいです。

１年間で破綻した!?　午前５時間授業

鈴　木　賢　二

転任してきて1年目のS市。6年前とは変わってしまったことが多々あり、そのうちの一つが学力向上対策である。本市の全国学力調査の結果は極めてよろしくないらしい。トップの命令なのか、トップに忖度した校長会が主体なのか分からぬが、必死に学力向上対策を打ち出してくる。

最も違和感を覚えたのが「午前5時間制」である。校長のグランドデザインなるものに以下のようなねらいらしき文言が記されている。

教育活動三つの柱

1　確かな学力の充実

（1）午前5時間制による

めりはりのある週時程の実施

①午前5時間授業（45分×1コマ、40分×4コマ）による集中した授業への参加

②「あすなろタイム」を活用した知識及び技能の定着

③実技教科を中心にした午後の授業の実施、ゆとりある昼休みによる子どもと触れ合う時間の確保

そもそもこの「午前5時間制」は、東京都目黒区の小学校で20年近く実践してきたものである。東京は宮城に比べたら1校あたりの教員数が多く、小学校では専科による教科指導が充実している。理科や音楽等をはじめとして担任の空き時間が週に5時間程度は当たり前と聞く。高学年に至っては最大7～9時間あったという友人もいる。

一方、宮城はせいぜい3時間程度の空き時間を確保できればよいという状況である。全くなしという教員すらいる。私は昨年5学年担任で、専科があるのは外国語の2時間のみ。外国語がある火曜日以外は全く余裕なしであった。午前中5時間分の授業とその準備を矢継ぎ早に行っていかなければならなかったのである。5分休憩が主で次の時間の準備が追いつかないことすら多々あった。放課後に全ての授業の準備をできればよいのだが、校務分掌等の仕事に忙殺されてしまい、勤務時間を過ぎて夜6時、7時になってもそんな時間はなかった。

校長がグランドデザインに掲げる理想は、絵に描いた餅に近いものだった。私は、学校評価の際に、「午前5時間制」に対する違和感と批判を書いたり、述べたりしてきた。次年度から、午前4時間の時程に戻すべきだと。以下、主張してきたことの概要である。

①あまりにせわしすぎて「子どもと触れ合う時間の確保」など難しい。宿題のチェックすらまともにできない。

②矢継ぎ早の5時間授業で子どもも教員も疲れがたまる。集中が切れる。

③5分の違いは大きい。40分授業では時間が足りず、指導が中途半端になってしまうことが多い。学力向上どころか学力低下を招いてしまう恐れがある。

④実技が伴う教科は40分では足りず、学習を保障できない。「実技教科を中心とした午後の授業」と書いているが、必ずしもその時間に実技教科をできるとは限らない。

⑤専科の授業が保障されていないのにこのままではやっていけない。

⑥昼休みは思った以上にゆったりとは取れていない。

しかし、否定的な意見ばかりではなくこの時程を評価している職員もいた。「スムーズに移行できた」「あすなろタイムは授業の補充にもなって良かった」「低学年も段々と慣れてきた」「昼休みが長くなって良かった」「（あすなろタイムを含めた）午後の授業は、理科の実験の際などに有効に活用している」といったことである。しかし、高学年担任の私としては馴染まないことの方が多かった。慣れというのは恐ろしいものだが、1年間せわしい日々が過ぎていった。

次年度計画の際に、この時程をどうするか話し合いがもたれた。結局のところ若干の時間の修正のみで次年度も継続することになってしまった。大きな反対意見は少なく、私も妥協したところはあった。そして、新型コロナ感染予防のためという口実の臨時休業へと突入していく。

新年度、異動により校長や教務主任が変わった。年度当初、2人ともこの「午前5時間制」の継続に異を唱えた。「これでやっていけるものなのか」と。しかし、私を含めた数人の職員が「もう1年やってみよう」ということになった経緯や前年度の状況を説明し、取り敢えずその時点では理解をしてもらった。一応、前年度職員で時間をかけて話し合って決めたことなので、簡単にはひっくり返すことはまずいとの判断も私自身にあった。今考えればその時に「じゃあ、45分授業に戻しませんか!?」と提案していれば良かったのかもしれない。

5月中旬に、突然、教務主任が「45分授業の時程にします」と提案した。校長、教頭、教務の三役会で話し合った上での提案だったようだ。「45分という学びの時間を確保したい」「ゆったりと過ごせる方が良い」「（今年は特に）時数の計算がかなり厄介になっている」ということが大きな理由だった。反対なし。かくして、「午前5時間制」は1年間で幕を閉じた。というよりも、破綻したという表現が正しいのだと思っている。市内でも未だに数校がこの「午前5時間制」を実施している。「馴染まない」という声は聞こえてきている。仕方がないことである。教育行政が財政的に豊かではない宮城には馴染まない取り組みなのだから。

半年以上が過ぎた。もちろん、2年目という慣れはあるのだろう。引き続き高学年の担任だが、昨年度に比べたら子どもも私もゆったり過ごしている。

（仙南・O小）

日本学術会議第 25 期会員任命に関する声明

みやぎ教育文化研究センター運営委員会

今般、内閣総理大臣は、日本学術会議が第 25 期新規会員候補として推薦した 105 名のうち 6 名について任命しませんでした。この件に関し、すでに多くの学会、学術組織、大学機関、文化団体、等から批判の緊急声明が出されています。

みやぎ教育文化研究センターは、宮城の地における教育文化、とりわけ子どもたちの健やかな成長・発達を支援する研究活動を担っており、当運営委員会も今回の内閣総理大臣の判断・行為は看過することができないと考えました。

「日本学術会議法」は、その前文で「科学が文化国家の基礎であるという確信に立って、科学者の総意の下に、わが国の平和的復興、人類社会の福祉に貢献し、世界の学界と提携して学術の進歩に寄与する」ことを使命として掲げています。

今回の事態は、日本国憲法第23条に保障される「学問の自由」及び21条に保障される「言論の自由」を侵害するものです。また、同時に「学術会議法」にも反していることは各学界からも指摘されている通りであり、これらは「民主主義」の根幹を蹂躙するものと言わなければなりません。

今回の事態を認めることになれば、学術会議だけでなく、大学を含むあらゆる学術機関への政治的介入を広げ、忖度や物言えぬ研究・教育機関や研究者を生み出すことに繋がりかねません。それだけではなく、さまざまな文化・教育活動等の制約や自由にも影響してくることがさらに懸念されます。

当センターは、1994 年の設立趣旨において、「子どもたちの健やかな成長と個性豊かな発達」「日本国憲法・教育基本法の理念の実現」「教育の再生」「研究の自由と公開の原則」を謳っています。すでに 2006 年には、教育基本法が改悪され、教育の自由に大きな影響が出てきています。

今回の事態は、学問の自由ばかりか教育・研究の自由をも一層制約しかねないと考えます。研究活動の成果は社会の発展に寄与するべきものであり、その制約はすなわち社会的損失であります。

以上のことから、当研究センター運営委員会は、内閣総理大臣が 6 名の候補を任命しなかった今回の行為を遺憾とし、下記 2 項の実行を内閣総理大臣に強く求めます。

1　日本学術会議が去る 8 月 31 日付で推薦した会員候補者のうち、任命されていない 6 名について、任命を拒否した理由を明らかにすること。

2　上記 6 名の任命拒否を撤回し、すみやかに任命すること。

2020年11月12日

気象庁の「生物季節観測」の縮小・廃止に思う

たちのわれこいく

千葉建夫

今年11月10日、気象庁が67年間続けてきた「生物季節観測」のほとんどを年内でやめると発表しました。都市化や地球温暖化で鳥や虫は見つからなくなり、植物の標本も観測に適した場所の確保が難しくなったからというのです。

植物はアジサイの開花、イチョウの発芽、紅葉、落葉などの6種9現象だけを残し、スミレ、タンポポ、シロツメクサ、サザンカ、サルスベリなど28種、動物は、モンシロチョウ、キアゲハ、ホタル、ツバメ、トノサマガエルの「初見日」、ウグイスやセミの仲間、エンマコオロギの「初鳴き日」などの23種はすべて廃止です。

観測廃止される動植物は、これまでほとんど身近に見られたものです。その姿が観測できないということは、同じ環境に生息していた他の多くの動植物も消滅しているということです。予想以上に気象変動、環境破壊が進行している警告と受け止めました。と同時に、これらの生きものは本当に姿を消しているのだろうかと疑問も持ったのです。

観測できなくなったのは、「気象台、測候所周辺」という発表です。自然界を生き抜いてきた生きものはそんなにヤワじゃないはず。観測できなかった生きものたちは新しい環境を見つけて、したたかに生きていることが多いのです。観測地点を広げてみたり、一般の市民の協力をよびかけたりするなら、まだまだ観測は可能なはずです。観測の縮小、廃止について、気象庁のなかでどんな議論がなされたのか知りたいものです。

＊　＊

今回の発表を聞いて、すぐ思ったのは、こどもたちはこれまで以上に自然から引き離され、季節感を感じられなくなっていくだろうということでした。

東北のつづり方教師の一人であった国分一太郎さんは、著書『自然このすばらしい教育者』（創林社）の序文に書いています。

「だれかからたのまれていうのではありません。だれかのじゃまをしようと思っていうのではありません。わたしのせつない思いからいうのです。

どうか、おかあさん。お子さんの季節感をおそだてください。ヤサイは、季節感をいだかせられるものを食べさせてください。『はつもの』は、その季節のほんとうのはつものを食べさせてください。花も季節をおもわせるものをながめさせてください。」

あとに続けて、ナス、キュウリ、マンサク、アジサイ、キンモクセイ……、野菜や樹木、花々の名を次々とあげ、旬の出会いをとおして、こどもたちの季節感を育ててほしいと切々と訴えています。

人は幼い時代に、自然のほんものの姿と出会うことで、心も体も健やかに育っていく。すべて「できあい」のものにだけ目をひかれる人になっては、季節感とともに育つ美意識も、人としての豊かな感性も育つことはないと国分さんは主張します。

この本が書かれたのは、40年前のこと、こどもたちとほんもの自然との出会いは、当時の状況をはるかに超えて深刻です。

＊　＊

小学校の国語の教材「ごんぎつね」には、美しい自然描写が多く、きんきんと鳴くモズの声、雨のしずくが光るススキ、咲き続くヒガンバナ、秋の夜に鳴くマツムシなどが登場します。この作品を授業でとりあげたとき、ススキをのぞいて、ヒガンバナ、モズ、マツムシを実際に見ている子は少数でした。墓地にヒガンバナの咲き続く場面を朗読したとき、「ああ、きれい」と思わずつぶやいた子がいました。その子は幼い頃に田舎のおばあちゃん

とあぜ道に咲くヒガンバナを眺めたことがあり、その情景と重ねて場面を想像していたのです。

他の教材の「かさこじぞう」も「モチモチの木」も「大造じいさんとガン」も「注文の多い料理店」も、すべて、四季の自然と生きものとのかかわりで物語は展開されています。幼い頃に季節を感じ、自然の生きものとふれあったりする体験は、作品を豊かに味わうことのできる喜びを子どもたちにもたらしてくれるのです。

＊　＊

北国では、ウグイスは「春告げ鳥」、カッコウは「種まき鳥」などとよばれ、農家の人の農作業を始める目安にされてきました。都会に住んでいても、各地の気象台で観測されたウグイスの初鳴き情報などがニュースで流れると、普段感じることのない自然や季節を意識させられ、ふとおだやかな気持ちになります。ウグイスに限らず、季節の折々の開花や初鳴きの情報は、学校や家庭の話題となり、子どもたちが季節を楽しむすべを学び、自然の生きものとの共感の心を育くむきっかけになりました。

観測をやめるということは、単に観測記録を残さないというだけでなく、季節とともに生きてきた人の暮らしや、そこから生まれた文化を根本から否定してしまうようなことなのです。

こども季節感が失

＊　＊

気象庁が大事な役割としている「気象観測」は、これからは膨大なデーターを分析、処理するＡＩ（人工知能）によって観測精度は限りなく上げていくことでしょう。でも、ＡＩが未知の現象のすべてを見通せるわけではありません。

生物観測で廃止されるクマゼミは、観測できないどころか、数十年前は首都圏に居なかったものが、近年は北関東にまで生息を広げています。セミの分布は気候変動や温暖化の指標として極めて重要な資料になっていると聞きました。

生きものの「いのち」とその働きは、38億年という長い地球変動のなかで滅びることなく続いてきた歴史を背負っています。季節の変化を予知する生きもののセンサーには、未知のものに柔軟に対応できる能力が潜んでいると考えられます。

これまで気象庁が継続してきた「生物季節観測」は、観測機器だけではとらえられない季節の変化や、自然界の異変を、自然の生きものたちの声に耳をかたむけ、聞き取ろうとする営みではなかったのでしょうか。

＊　＊

私たちの暮らしは、いつも季節とともにあります。どんなに先を予想しても、季節を追い越し先に進むことも、季節に逆らうこともできません。季節のめぐりの外ではなく、季節の中で、私たちは、自然の恵みをうけ、他の生きものたちとのつながりに支えられ、生きています。

国分さんのことばにならって、訴えたいのです。

「日夜、国民のために働いておられる気象庁のみなさん。どうか、こどもたちが季節感を感じて、小さな生きものたちのことを考える機会を、国が先頭にたって、これ以上なくさないでください。ともに地上に生きる鳥や虫、植物たちの変化や季節の移ろいを記録することは、長い目でみれば、日本の自然と文化、教育を守り育てることになるはずです。

どうか、こどもたちのために、知恵をあつめ工夫して、『生物季節観測』を続けてください。先人が積み重ねてきた貴重な財産を、どうか、なくさないでください。」

（元教員）

おすすめ映画

「コロナ禍のクリスマスがもたらすもの」

デイヴィ・アンウィン／監督
1991年製作

今回はクリスマスについて。センター通信が届くころには過ぎているはずですが、悪しからず、お付き合いください。

子どもの頃から、年末にはワクワクがあった。2学期の学校が終わって冬休みになれば、すぐにクリスマスがあるからだ。家族揃って何かを楽しんだ記憶はあまりないのだが、それでも、イブの晩には親父がアイスケーキを買ってきて、サンタからのプレゼントを楽しみに過ごしていた記憶は残っている。

教員になってからも、私の子どもの頃と全く同じ、クリスマスを楽しみにしながら冬休みを心待ちにする多くの子どもに出会ってきた。そんな子どもたちの夢を膨らませるべくクリスマスに関わる絵本やビデオを2学期のお楽しみ会の一つと称して見せてきた。

そのビデオとは、「ファーザークリスマス」(以下FC)。サンタはどの子どもにとっても憧れ。そのサンタがちょっと人間味があって、ユーモラスで親しみがあると分かると、子どもはますますサンタへの思いを膨らませる。そんな子どもたちの姿を多く見てきた。

そんなクリスマスであるが、今年は何と12月25日まで学校の授業がある。言うまでもなくコロナの影響である。クリスマスイブの翌日。子どもたちは、サンタから何をもらったかを学校で話すだろう。その中には、様々な事情でプレゼントをもらえない子もいるだろう。「サンタなんかいないんだよ。」などという子もいるかもしれない。これまで通りなら、クリスマスの話題は家庭などごく小さい世界で完結し、年明けの学校に持ち越される心配はなかった。でも、今年のクリスマスは幻滅してしまう子もいるかもしれない。そういうことまで考えて冬休みの短縮を決めたのだろうか。子どもの夢を育むはずの学校が、夢を壊しかねないことに心が痛む。冬休みの短縮は、単なる休みが短くなるだけでなく、心まで縮こませるものかもしれない。

いけない、いけない。心配ばかりしたって未来は明るくならない。ならば、目の前の子どもと希望の明かりを灯していこう。自分ができること、そうだ、今年も子どもたちとFCのビデオを見て、温かい時間を過ごそう。2021年はきっといい年になることを願って……。

（鈴木　吉雄）

センターの動き

〈10月〉
9日　「つうしん」100号発送　第8回事務局会議
17日　『教育』(10月号)を読む会（9名）
20日　こくご講座第3回世話人会　第1回講座の総括
23日　第9回事務局会議　101号内容検討　新春講演会の開催決定
29日　ゼミナールSirube『人間教育の哲学史』ジョン・デューイ教育論（12名）
31日　「みやぎ教育のつどい」（オンライン開催）午前：シンポ「コロナと学校教育」午後：記念講演　サヘル・ローズさん（168名）

〈11月〉
10日　こくご講座　第4回世話人会　第2回の講座について
12日　「日本学術会議第25期会員任命に関する声明」（センター運営委員会）発出
14日　第7回研究部　2次コロナアンケートのまとめ分担。座談会「コロナ禍での学校教育」小・中・養護教諭（10名）
15日　第20回道徳と教育を考える会「江戸期の教育事情③宮城の養賢堂など」（9名）
20日　2020年度第1回運営委員会　20年度前半の活動と後半の計画（12名参加）
27日　第11回事務局会議　101号リニューアル化について検討　A4判化決定
28日　『教育』(11月号)を読む会（8名）　2020こくご講座　第2回「教材の魅力と授業の醍醐味」（28名）
30日　ゼミナールSirube『人間教育の哲学史』ジョン・デューイ教育論（12名）

〈12月〉
3日　「震災のつどい」実行委員会で2021年2月27日（土）フォレスト仙台第5・6会議室13：30～に決定
8日　こくご講座第5回世話人会　第3回こくご講座の開催を2月13日（土）13：30～詩の授業～に決定
11日　第11回事務局会議　101号のリニューアル化について検討
14日　ゼミナールSirube『人間教育の哲学史』ホワイトヘッド教育論（12名）
19日　『教育』(12月号)を読む会　7回研究部会議　2次アンケートのまとめと「提言」について
25日　第11回事務局会議　101号の発送　102号の内容検討

編集後記

広島・長崎に原爆投下されてから75年の今年10月24日、批准国が50か国に達し「核兵器禁止条約」が来年2021年1月22日に発効することになった。歴史的な日。国連のグテーレス事務総長は「条約の発効は、これを強く求めてきた被爆者たちに報いるもの」「これまで積み重ねられてきた全世界的な運動の成果」と声明で述べている。アメリカの傘の下にあり、この条約に背を向けて批准も署名もしない日本政府。新しく始まった日本政府に条約への参加を求める署名を広げたい。

思えば、私が大学生だった1977年、日本で「NGO被爆問題シンポジウム」が開催され、被爆の実相と被爆者の実情が初めて世界に明らかにされた。私はその宮城の調査員（102名）の一員として宮城県内の被爆者の方からお話を伺った。同年『子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会』の運動（賛同者が2冊の写真集を購入し1冊は英訳したもので世界各国に送る）が開始され、宮城からも多くの方が参加（第1次分131名）。そして翌1978年ついに「第1回国連軍縮特別総会」が開催され、被爆者が被爆の実相と核兵器廃絶を全世界へ訴えたのだった。その77年「被爆シンポ」が採択した世界に向けたアピールが『生か忘却か』であった。忘れてはならない。

実は、年明けの1月9日に研究センター主催の講演会『核兵器禁止条約発効の前に』の講師として、日本被団協代表委員の田中熙巳先生にお願いしていた。田中先生は、少年時代に長崎で被爆、77年当時は東北大学に勤められ、宮城被団協の役員で被爆者援護・核兵器廃絶の運動の先頭に立ち、私たちを導いてくれた。コロナ感染拡大で今回の講演会は延期となった。残念。開催時には、ぜひ多くの方にご参加いただきたい。

※　今号からA4判になります。皆さんにとってさらに読みやすく充実した「つうしん」をこれからも目指していきます。ぜひ感想・要望等をお寄せください。

（達）

発行：(一財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター　2020・12・25　発行責任者：高橋達郎
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45 フォレスト仙台4F　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026
http://mkbkc.forestsendai.jp E-mail mkbkc@forestsendai.jp　印刷 株式会社きた出版